

# 川柳 さいたま



柿守木

2019年  
12月号 (No.721)

日川協加盟

## 巻頭言

川柳侍とくごいん

願法みつる

一年の締めには肩の軽いお話で一席。時代物小説の愛好家も居られましょう。ぎらぎらした現代物よりは気楽です。小松重男氏著す侍ものシリーズの中に「川柳侍」がある。徳川十代將軍家治の頃、世に川柳点前句付が滅法流行った。そんな江戸は回向院門前の取次風景から始まるこの小説の題名に、なんともくすぐり感がある。さる大名家のご隠居を筆頭にその老臣、根付職人、公事師、植木職人からなる五人の川柳仲間の交流物語である。市井の賑わいの様子も描かれる。放し亀を商っている才槌頭の男が、巻尾になって実は柄井八右衛門であることを引き出すなど、ニヤリである。文中の古川柳は百五十を超え、その一句目が「色男金と力はなかりけり」。百句目に「役人の骨っぽいのは猪牙にのせ」もあり、「川柳評万句合」や「俳風末摘花」の句を解釈しながら、テンポ良く物語が進む。中盤、ご隠居のお国入りの旅立ちの様子が描かれ、道中の話題に移る頃から、話の筋に緊張感が高まる。最終盤、目に見えぬ悪の手先をあぶり出す場面あたりからハッピーエンドに至る筋の運びには、手慣れた作家の力量が読者を楽しませてくれる。時代考証の確かさで時代の香りを出す。登場人物の数も程良く、記憶力が減退しがちな老人読者には格好の刺激剤となる。年の瀬、なじみの川柳句に出会いながら、頬を緩められては如何だろう。十六年前の出版。

日日は好

願法みつる

年の瀬の肩の重みへ知らんぶり

低く往く陽も重たげな息の切れ

スマホでも本は読めると金次郎

悲劇モノもう止めようよ胃が痛い

頬ゆるむ時代話に餅の味